

石油と人とのかかわり

縄文時代

縄文人は石炭(せきぞく)を棒に取り付けたり、土器や土偶(どくわ)の接着剤としてアスファルトを利用していました。村松町の矢津遺跡や阿賀野市安田地区の藤堂遺跡、ツベタ遺跡のアスファルトは新津産のものと思われます。新潟県にはほかにも黒川の草生水(くそうず)に近い青田遺跡や奥三面遺跡からも出ています。如法寺油田に近い下田村赤松遺跡、三条市上野原遺跡にも出ています。

黒川村胎内には、注がしみ出す地層があり、新潟県天然記念物に指定されています。



アスファルトが付着した石器

古代

天智天皇が即位された西暦668年に「越の国から燃土、燃水が近江大神宮に献上された」と日本書記に記されています。燃土は石油、燃土はアスファルトのことで、越の国のどこから献上されたかは判っていません。黒川村では毎年7月に燃水祭りが催され、カグマで草生水の坪(池)から採油し、近江神宮に奉納しています。西山町でも「草生水献上場」をつくり、草生水祭を行っています。



燃土・燃水の献上の画

中世

鎌倉時代の1221年に金津資義が築城の際、草生水(油)がわいたといわれ、金津開基坪や堀出(ほりいで)神社の由来とされています。



黒川村の燃水祭り

近世

1608(慶長13)年柄日本の真柄仁兵衛によって「煮坪(にえつぼ)」が発見されました。江戸時代になると、旅行記などに草生水の産地がでてきます。臭水は草生水または草水と書かれるようになり、石炭油、石油という言葉もでてきます。天然ガスは陰火または風草生水、ガス井戸は火井とよばれました。草生水の産地は、菅江真澄の「高志の長阪」や橘崑崙の「北越奇談」にでています。その中に藤原部の草生津村、新津村、柄日本村もでています。不思議なものとして、柄日本村の煮坪もあげられています。



▲高坪温泉

▲煮坪 右奥手に新沢洞門

天然ガスを燃やしている(北越奇談より)
(資料提供:富山大学附属図書館)

近代

1910(明治43)年頃、柄日本油田の風景
大八車で原油を運び出していた。

1905(明治38)年頃の金津油田の風景